

今回は「新元会図」という蘭学者たちの宴会の絵を紹介しましょう。

時は寛政6年（1794）閏11月11日。当時江戸蘭学界の中心人物だった大槻玄沢は、太陽暦で正月を祝おうと家塾「芝蘭堂」に同志を招いて宴を催しました。その時の楽しい様子を門人に描かせ、さらに参加者の賛（絵に添えた詩歌）を書き加えたのがこの「新元会図」です。別名「おらんだ正月」とも言われています。

この年の5月、玄沢は長年の念願がかない、長崎から江戸にやって来たオランダ人と初めて会うことができました。よほど感激したのか、対談の記録には「本懐の至り」とあります。そんなウキウキした気持ちから、この風変わりなパーティーを計画したのかもしれない。

では、もつとよく図を観察してみましょう。テーブルの上にはナイフとフォークがセットされ、ワイングラスのような物も見受けられます。これはまさに西洋料理風ではありませんか。

壁に目をやれば、何やら西洋人の絵が掛けられています。これは医学の神様ヒポクラテスとも、ドイツの外科医ハイステルとも言われています。まだまだ学会でもはつきりしていません。棚には、革で装丁された洋書や鴛管（羽ペン）らしき物も置かれています。

テーブルの周りには、主人の玄沢を始め稲村三伯ら名だたる学者29人が勢ぞろいしています。その中にはロシア帰りの大黒屋光太夫の姿も。国禁を犯したため、その頃は江戸で軟禁状態でしたが、ロシア語が話せたので招待されたのでしょう。

# 洋学博覧漫筆

～新元会図と宇田川玄随～

実は、この会に津山藩医・宇田川玄随も招かれていました。中央にある柱の真下、黒い衣をまとって隣の人を指差している人物、これが玄随ではないかと言われています。

玄随は前年（寛政5年）から、10年も掛けてようやく翻訳した日本初の西洋内科書『西説内科撰要』の刊行を始めていました。その事業は仲間たちから大変尊敬されていたのでしょう。祝宴の席の上座に座っていることから、そんなことを想像してしまふのです。



▲「芝蘭堂新元会図」（早稲田大学図書館所蔵）

※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のものである。

## 6月中のひとの動き

人口	109,816人(前月比+5)		
男	52,346人(同△6)		
女	57,470人(同+11)		
世帯	43,743世帯(同+44)		
転入	235人	転出	233人
出生	92人	死亡	89人

(7月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



## つぶやき 編集室

今年の夏も多くのイベントが開催され、生っ白かった肌もこんがり和小麦色に焼けました。夏休みを楽しむ子どもたちの笑顔がふれ、取材しているこちらもうキウキと楽しいひとときを過ごさずにはいられません。(8)



津山圏域消防組合での救急車の利用は、平成19年度約7,400件で10年前に比べて約1.5倍。搬送された人の約半数は軽症。限りある救急車の命を奪うかもしれません。救急車は適正に利用しましょう。(2)

ギリギリ照りつける太陽も、もくもくと空に浮かぶ入道雲も、耳の奥に響くようなセミの鳴き声も大好きな夏なの…。今年の夏は暑い…。ちょっと暑すぎ。水分をしっかり取って、熱中症にはくれぐれも注意しましょうね。(和)



編集・発行 (毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室 (市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

